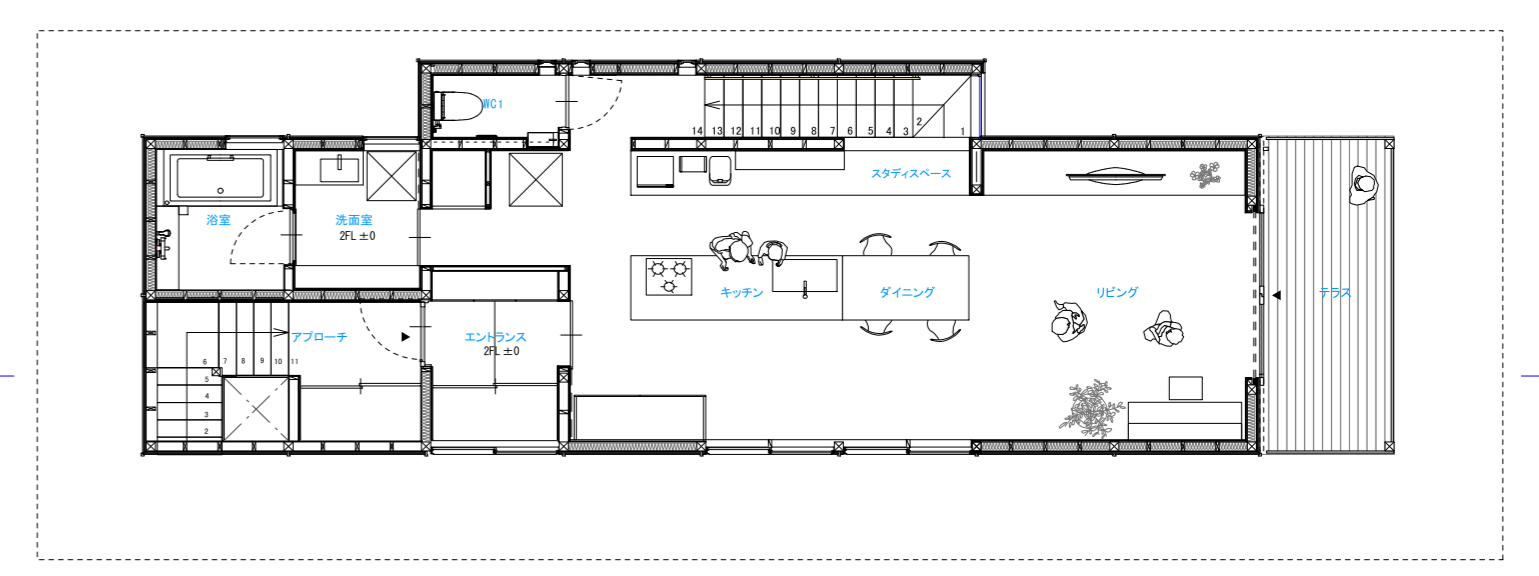
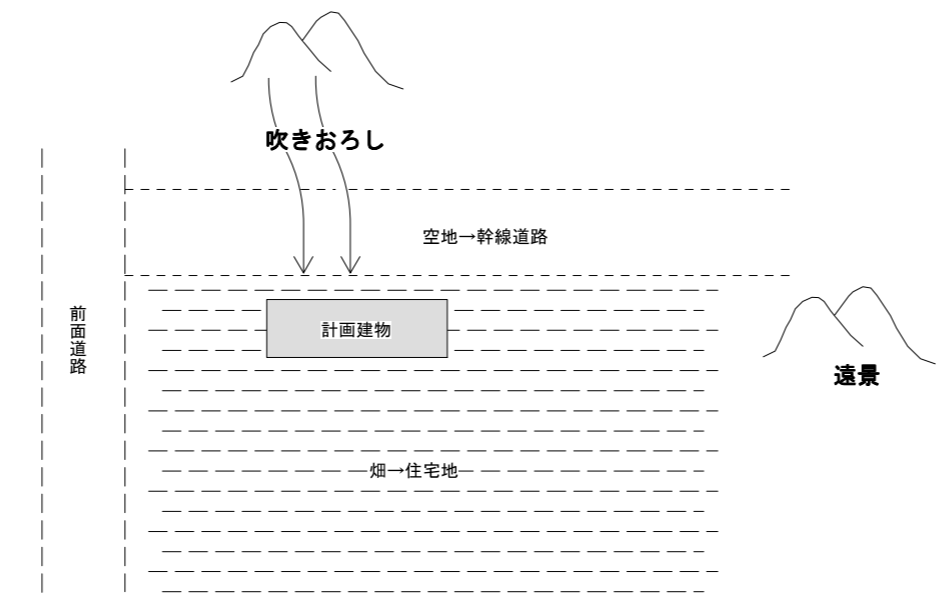


# 上原の家

House in Uwahara



敷地は、農地に囲まれた緩やかな斜面地であり北から東まで町並みを一望できる好立地である。のどかな風景として数十年続いていた場所にひとつの建物が加わると、それをきっかけに場所の印象は大きく変わる。よって風景を刺激することなく以前から佇んでいたような建築とはどのようなものか考えることにした。敷地調査の際、少し離れた場所に丸太の柱と梁に屋根を載せただけの簡素な牛舎と納屋を見つけた。最小限の要素で作られたその建物は、風景に繋がる透明性を備えており、広がる農地のなか、境界が霞んでいた。そこでこの簡素で未完の内部をもつ建築というのが、自然や風景と建築が繋がる際の手がかりになると考え計画に取り入れた。まず、最低限必要な柱梁に大らかな屋根を架けた。1階は軒下や内庭、縁側、寝室が等間隔な柱割の中で内部を介して階段状に繋がる。地続きの半外部空間は、周辺の風景へと視線が抜け、山からの季節風の通り道となる。主な生活空間は、将来周囲が閑静地となった際にも変わらず景観が望めるように2階に配置。外部のアプローチから浮いたヴォリュームの中に潜り込むように階段を上ると、大らかな気積をもった生活空間がその先の眺望に繋がる。将来敷地の北側に大橋模様の幹線道路が予定されていることから、現在の農地と将来的な住宅地というふたつの異なる敷地環境を想定して計画する必要がある。住宅地となるその時、大らかに架けられた屋根の下半外部空間は公私を超えて余白として考がいていき、近隣の住宅にはその先の風景や風が届くだろう。住宅地の余白が繋がり、風通しのよい、透過性のある町並みが連続すると、いまある農地とは別の魅力的な住環境が生まれる。この住宅がモデルとなり新たな町並みを作ることが出来たら、暮らしはおのずと外部に溢れ、それが町の風景となる。透過性のある住宅計画が新たな住宅地に向けた提案につながることを願う。



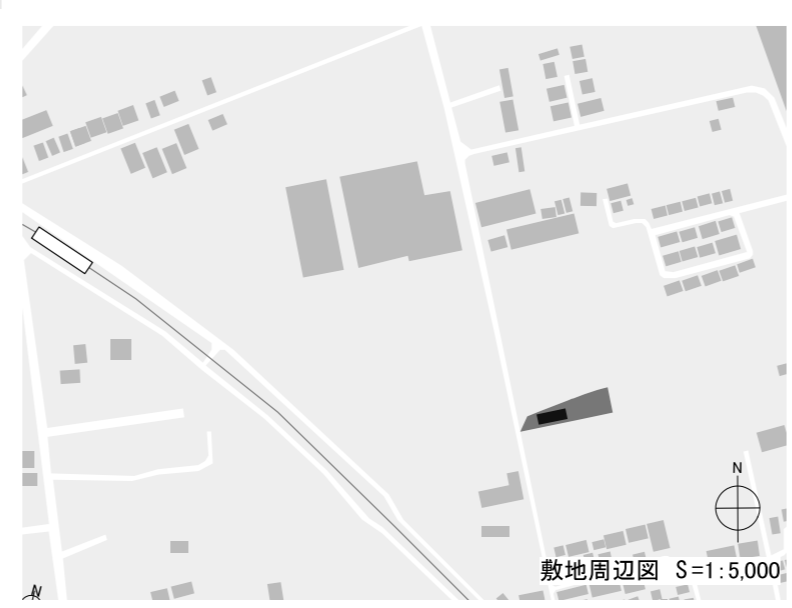
2階平面図 S=1:100



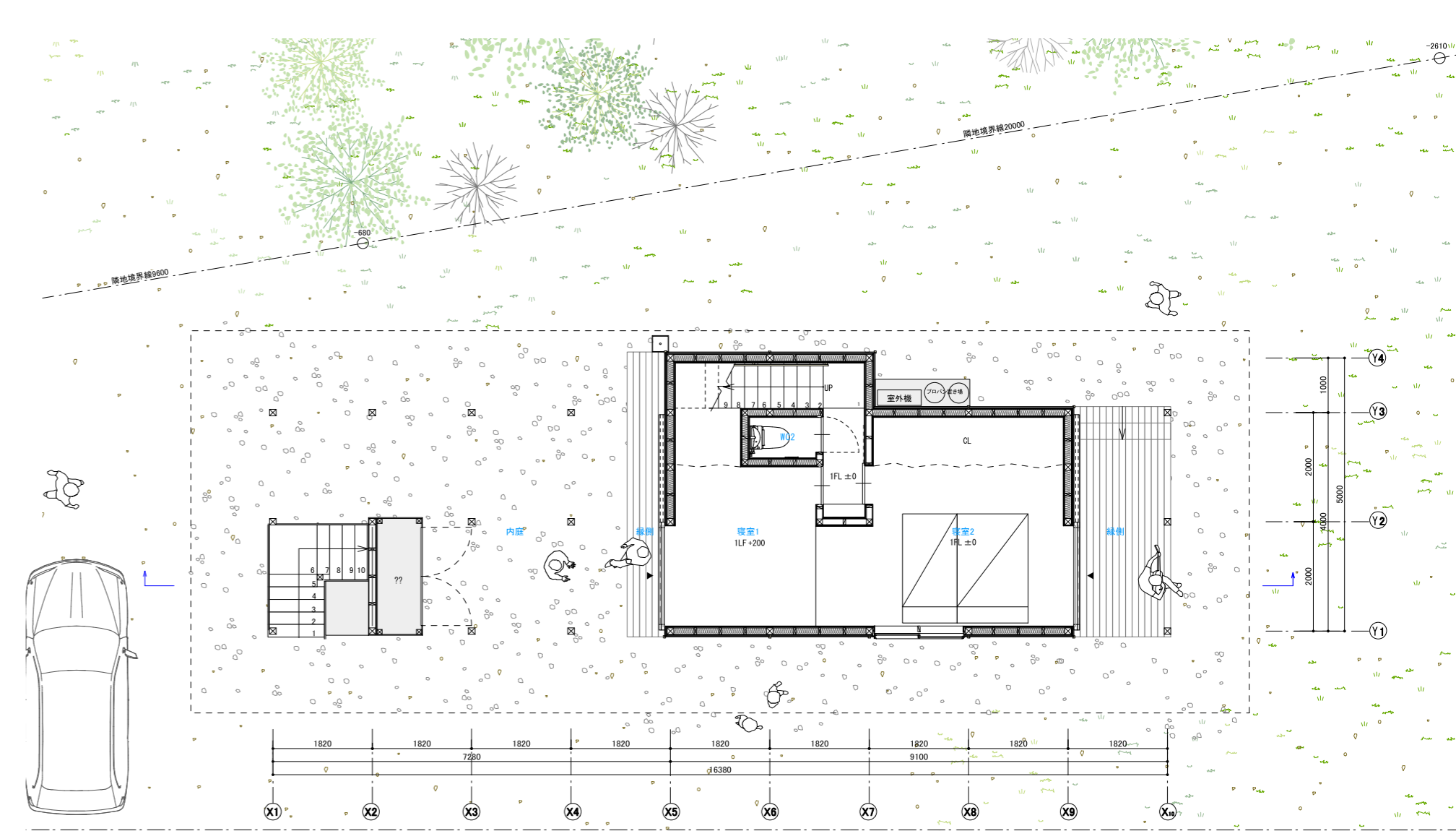
西側全景。広大な敷地に開口と高さを抑えて構える。



東側全景。遠方に向けて大きく開く。



風景と連なる北側の牛舎



配置図兼1階平面図 S=1:100



内庭から寝室を介して東側の街並みが望める。



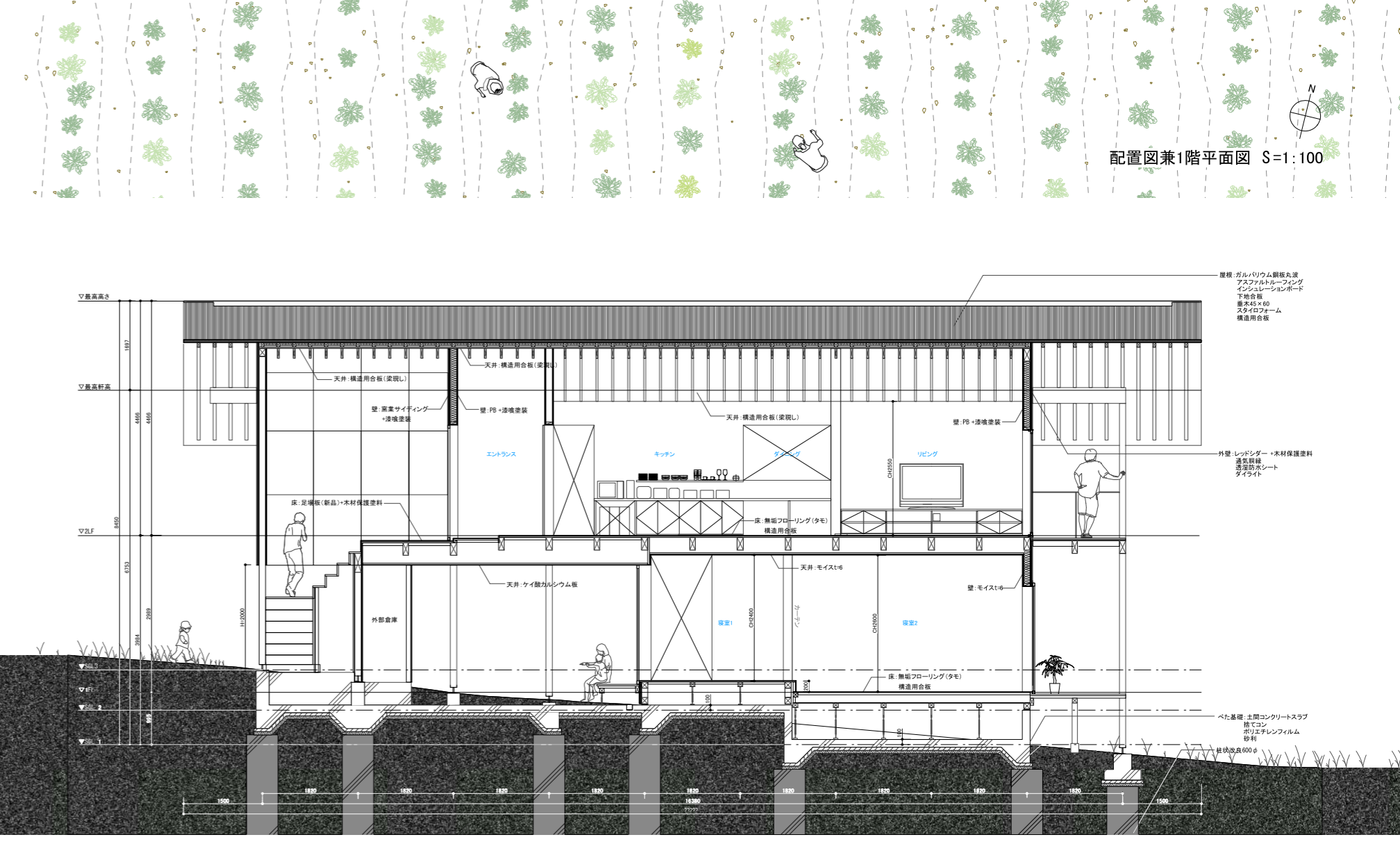
全ての居室から遠景を眺めることができる。



計画前の敷地



数十m先には住宅地が広がる



A-A'断面図 1:100



東西(内外)の動線と南北(外部)の抜けが交差する中庭



風景と一体化したテラス